

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第130号

イザヤ 65:1

平成18年7月28日

あなたगतとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。それは、この人たちが心の励ましを受け、愛によって結び合わされ、理解をもって豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。私がこう言うのは、だれもまことしやかな議論によって、あなたがたをあやまちに導くことのないためです。私は、肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたといっしょにいて、あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでます。あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならないよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。

コロサイ人への手紙2：1－15。

パウロがローマで牢につながれていたとき（おそらく、軟禁状態に）、小アジアのコロサイの教会にいくつかの異端的教理が持ち込まれ、問題を引き起こしていることで、同じく囚人の身にあったエパfrasが訪ねてきました。パウロが第三次伝道旅行でエペソに滞在中、パウロの福音宣教によってキリストを受け入れたエパfrasによって設立されたと思われるコロサイの教会は、御霊の愛に満たされてスタートしたはずだったのに、時が経つにつれ、異端的教理が混入し、パン種が捕えどころなく広がるようにはびこり、教会の焦点が神の奥義キリストから離れ始めていたのです。パウロは、この教会の危機を救うために、他のどの書簡よりも進んだ神学、包括的なキリスト教理をこの書簡の中で展開させています。御子による神との和解の対象を人間だけでなく、天地万物にも及んで説いているのはその大きな特徴のひとつです。

「あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられるのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。」（コロサイ人1：23－24、下線付加）と、自らに託された使命感に燃えて、パウロが「自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘（する）」ことに挑んだ「むなしい、だましごとの哲学」こそ、二世紀初頭に大きく発展した異端、グノーシス主義の萌芽だったのです。異端に立ち向かうには、霊的な知恵と理解力によって「神のみこころに関する真の知識に満たされ（る）」ことと確信したパウロは、神の奥義キリストと正しいキリスト信仰を包括的にまとめあげたこのコロサイ人の手紙を書き記したのでした。

「(欠けを) 補う」という意味のギリシャ語動詞をパウロが用いたために、解釈が厄介になっている上記の聖句の真意は、キリストの十字架上で贖いの犠牲の死が人類救済のために不十分であったという意味ではもちろんありません。パウロが洞察したのは、コロサイの教会だけでなく、テキコに書簡を託したエペソ、ラオデキヤ等他の教会に対しても、何か切実に訴えなければならぬ危機感でした。人が救われるのは「キリストの贖いの死」を信じる信仰によること、また、キリストが十字架上で達成してくださった死と甦り以外に付け加えるものは何もないこと、このキリスト信仰の真髓、奥義をパウロは命をかけても伝えなければならぬと感じたのでした。当時教会に広がり始めていた「人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または肉体の苦行など」「人間の戒めと教え」を救いの条件として付け加える風潮は、『信仰義認』に集約される純粋なキリスト信仰を宗教の実践にすげ替えた異端以外の何ものでもありませんでした。しかし、そのような人間の努力、献身、修業をどんなに積み上げても、キリストによる救いに何の違いも効果ももたらさないどころか、キリスト以外のものを求めることにより、父なる神の御旨を拒む、偶像礼拝の罪に陥ることになるのです。もしキリストを一旦受け入れた者が、そのような世俗的な教えに惑わされ、キリストから、また、真の福音から離れてしまうとすれば、パウロの苦闘、闘いは、全く空しいものになってしまいます。

キリストを受け入れたすべての者を最後まで信仰に踏みとどまらせ、「キリストにある成人として」完成するまで導くという、この「神からゆだねられた務め」を全うすべく、パウロは正しい福音宣教伝播のため、苦しみ、闘っていたのでした。キリストのからだなる「教会」に対するパウロの責任感が、パウロの苦闘を最後まで支えたのです。もしパウロが「キリストの贖いの死」を伝える福音のために苦しんでいるとしたら、すなわち、しもべが主のために苦しんでいるとしたら主はなおさらのこと弟子の苦しみをともに味わってくださっているでしょうから、主キリストのために苦しむ使徒パウロのゆえに、キリストの苦しみは二千年前のあの十字架の苦しみを超えて、今も続いているのです。言い換えれば、キリストはご自分の民ユダヤ人への宣教に照準を置かれましたが、まだキリストが手がけられなかった異邦人への福音宣教に命を賭けて献身した使徒パウロは、主とひとつ思いになって、主の十字架上で苦しみの延長を異邦人宣教のため、教会のため担ったということでした。このパウロの主の献身するしもべの心の主との完全な一致が、パウロをして、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのですと、言わしめたのでした。

人々が、知恵と知識の宝庫であるキリスト「神の奥義であるキリストを真に知る」こと、そして、主キリスト・イエスにあって歩むことが、「むなし、だましごとの哲学によって、だれのとりこにもなら(ない)」ための処方であるとパウロは語り、聖書が証しする福音の真理を否定したり、ゆがめたりする新奇な教えを「人の言い伝えによるもの」「この世に属する幼稚な霊力(又は、教え)によるもの」「キリストに基づくものではない」と厳しく警告し、手紙の中で以下のように正しいキリスト像、広めるべき正しい福音を訴えています。

1. キリストは万物に優越するお方一見えない神のかたち、満ち満ちた神の本質、万物を造られた方(創造者)、万物より先に存在した神の御子、教会のかしら、初めであり、死者の中から最初に生まれた方(最初に甦られた方)、贖い主、十字架の血によって万物を父なる神と和解させてくださった方、すべての支配と権威のかしら、人々を暗闇の圧制から救い出す方、暗闇の力、支配を解除された方—
この真理に対し、異端はキリストを被造物とし、神性を否定する
2. キリストの内に宿っている「神の満ち満ちたご性質」、キリストの内に隠されている「知恵と知識との宝」以外の、特殊で深奥な知識「靈知」を主張する哲学は異端である
3. 旧約の律法、儀式遵守を強調し、飲食の規制、祭典、安息日の制約、割礼の実践等を強要するのは、「用いれば滅びるもの」「人間の戒めと教え」、すなわち、異端である
信仰によって「キリストの割礼」を受けたキリスト者は、罪赦され、生きる者とされたので、自らの業を積み上げることによってではなく、かしらであるキリストに堅く結びついていることによって、「からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられる」聖化の過程を日々歩むことになる
キリストにあってすでに贖われ、生かされた者が、ユダヤ教の律法、儀式、規約等々に逆戻りする必要はもはや全くないのである
4. 霊的完全を達成するために「肉体の苦行」を強いた禁欲主義は、物質も体も悪であるとする

間違った前提に基づいた異端で、適度な節制、鍛錬は健康上益をもたらすかもしれないが、真の靈性を発達させる力は皆無

墮落した人間性は体を支配し、罪のために用いることを好むが、神が造られた人間は、肉体から脱出して霊だけになることを完全として造られたのではなく、靈肉（厳密には、靈・魂・肉から成る三元）のバランスが取れてこそ「よし」、完全な人間とされたのであった。体そのものは悪ではなかったが、墮落の結果、「サタン」、すなわち、「罪」が入って体は汚れ、肉に化した

しかし、信じる者にキリストと同じ甦りの体を与えられる『最初の復活』、キリストの再臨のとき、サタンによって肉に化した体は滅び、靈肉ともに文字通り完全にされるのである

5. 当時、ユダヤ人の間で、天の御使いを尊ぶ念はあったが、御使い礼拝 の実際を証拠立てるものはない

しかし、天界の被造物が太陽、月、星等の天体と連合して地上に影響を及ぼすという考えを支持する一種の占星術を説く東洋思想や、ギリシャ思想の影響で、御使い礼拝が行われていたことは十分考えられる

しかし、書簡に記されている御使い礼拝 という表現を逐語的に捉えるより、パウロの意図はむしろ、唯一の仲介者であるキリストに代えて御使いを位置づけることは、勝てるレースをみすみす落とすことであるから、キリスト信仰から道を踏み外さないようにという警告にあったのかもしれない

いずれにせよ、キリストが他のものにとって代えられるとしたら、それはすべて異端である